

造がみられるのに対して、faithについては、その対象である「神」は人知を超えたものとして、また人それぞれに應じて多様であるとして、その概念内容に踏み込むことはない。中心はあくまで人間の側にある。「伝統」についても、シュオンの場合、それは遠い過去に由来する聖なる伝統として「与えられ」、固定したものとみられる。他方、スミスにおいて「伝統」は、歴史的に捉えられ、人間の創造的解釈によって変化し、常にプロセスの中にある。

その背景に何があるのか。「永遠の哲学」の教祖的存在であるルネ・ゲノンによれば、西洋では近代文明によって伝統の聖性は破壊され、究極の真理への到達は不可能になり、東洋で直接導師に指導を仰ぐしかない。こうして形成された西洋エリート集団の次になすべきことは、失われた西洋の伝統的文明を復活することとなる。

他方、スミスの究極的狙いは、「世界神学」(world theology)の構築である。これは、グローバル社会の到来により、諸宗教はもはや自己の排他的正当性を主張することは不可能となり、相互に正当性を認め、理解し、平和的に共存するしかない、との認識から出たものである。彼はそれを「比較宗教の神学」(theology of comparative religion)とも呼ぶが、それは従来「宗教の神学」(theology of religions)の枠をはるかに越えるものである。

そこでは、人類は一つの共同体と考えられ、すべての宗教も一つの大きな流れの一部とみられる。各宗教は従来のようにその個性を保持しながらも、一つの大きな人類宗教史の一分枝と

なる。むろん、そのためには、各宗教は従来の特権主義を改める必要がある。そのような営みを相互に正しく理解するには、伝統の歴史を学問的に正確に認識するだけでなく、それが現在当事者たちにどのように解釈されているのかを、対話によって知るしかないし、その意味で理解の当否は当事者の判断に仰ぐしかないのである。

コプト教会と総主教——シヌードⅢ世の果たした役割——

岩崎 真紀

二〇一二年三月、エジプトの宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教（コプト正教会）の第一七代総主教シヌードⅢ世（一九二三—二〇一二）が逝去した。エジプト総人口の一〇—一五%を占めるコプト・キリスト教徒に関しては、雇用や昇進、宗教実践などに関する差別がある一方で、一九五二年革命以降は有力な政治家や団体が存在しないため、教会の長である総主教は、宗教面における指導者であるだけでなく、政治、社会、経済などあらゆる側面に関するコプト正教会ひいてはエジプトのキリスト教徒全体の実質的なスポークスマンとしての役割を担っている。そして、それはとくに社会変動の大きいこの四〇年間総主教を務めたシヌードⅢ世に当てはまる。本発表では、シヌードⅢ世の生涯を概観しつつ、インタビュー調査の結果からコプト民衆にとってシヌードⅢ世とはどのような存在であったのかを明らかにした。

シヌードⅢ世は一九二三年アスユート県に生まれた。大学卒業後はコプト復興運動の中心的担い手であった日曜学校運動

でリーダーとして活躍し、五四年には修道士となり、六二年にはキリスト教教育の主教に叙任された。総主教となった七一年当時、エジプト国内ではイスラーム復興やサーダート大統領のイスラーム主義寄りの政策によりコプト・ムスリム関係は危機に瀕していた。かかる社会・政治状況のなかでコプトの権利擁護のため積極的に政治に介入したシヌヌーダ三世はサーダートと鋭く対立し、最終的には八一年サーダートがシヌヌーダ三世を西方砂漠の修道院に幽閉させる事態にまで発展した。他方、ムバーラク政権下では、コプト共同体の置かれた立場に対する積極的改善はなかったものの、政権がイスラーム主義勢力とは距離を置き、急進派の弾圧に力を入れたため、結果的に教会―政権関係は改善された。これにともない、シヌヌーダ三世の姿勢もそれまでの闘争的なものではなく、より融和的なものとなった。

つぎにシヌヌーダ三世が民衆によってどのようなイメージを持たれていたのか見てみよう。考察の対象とするのは、筆者が二〇一二年七月に首都カイロと南部ミニヤ県の農村で三三名に對して行なったシヌヌーダ三世の業績等に関するインタビュー調査の結果である。

シヌヌーダ三世のイメージとしてまず挙げたのが「賢者」という回答だった。これは、政権との対立、急進的イスラーム主義勢力によるコプト教会への襲撃、海外移住者の増加など、新たな問題が顕在化した困難な時代にコプト共同体の代表として活動した彼の姿勢を肯定し、評価していることを表している。「教育者」というイメージは毎週水曜日にカイロの聖マル

コ大聖堂で行なっていた一般信徒に対する教育的レクチャーによるところが大きい。霊的な事柄だけでなく、日常的、個人的なことなど多岐にわたる質問に対応するシヌヌーダ三世の姿は一般信徒に親しみやすさを与えた。また彼は「ディアスポラのための活動」を積極的に行なった総主教としても評価が高い。政治・経済・宗教的理由から永続的に欧米諸国へ移住したコプトは、現在では二〇〇万人以上いるといわれる。シヌヌーダ三世は、自身の定期的な訪問だけでなく、主教、司祭、修道士の派遣、現地での教会・修道院建設にまで活動の幅を広げた。

このように民衆のシヌヌーダ三世の評価は肯定的なものばかりだったが、この背景はコプト正教会のある種の権威主義的体質が考えられる。コプト正教徒にとっては、総主教をはじめとした高位聖職者は神と一般信徒を媒介する聖なる存在であるため、一般信徒が彼らの言動に対する疑問や批判は原則的には不可能である。しかし、実際には内部批判があったこともまた事実である。今後はその点についての検討もおこなっていききたい。

中世ユダヤ教の聖書解釈における基準の問題

志田 雅宏

中世のユダヤ教聖書解釈は、従来のラビたちの聖書釈義(「デラシュ」)から、聖書テキストの字義的解釈(「プシヤト」)への転回として描かれる。方法的に言えば、「デラシュ」とは聖書から法規や教訓、説話を導き出す解釈をさすのに対し、「プシヤト」とは「テキストが意味すること」の理解を目的とする解